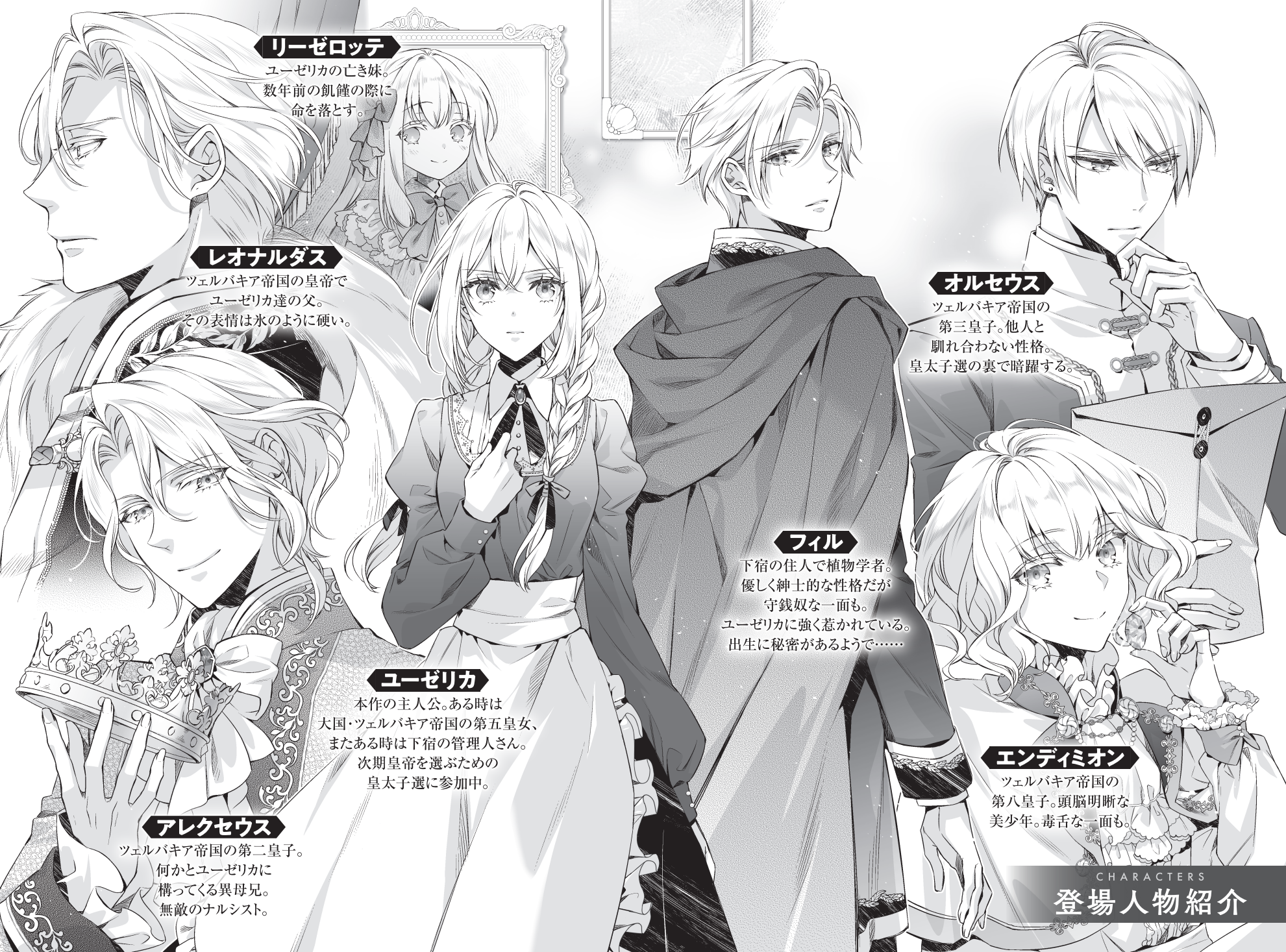
第五皇女の成り上がり！
捨てられ皇女、皇帝になります４


リーゼロッテ
ユーゼリカの亡き妹。
数年前の飢饉の際に
命を落とす。
レオナルダス
ツェルバキア帝国の皇帝で
ユーゼリカ達の父。
その表情は氷のように硬い。
オルセウス
ツェルバキア帝国の
第三皇子。他人と
馴れ合わない性格。
皇太子選の裏で暗躍する。
フィル
下宿の住人で植物学者。
優しく紳士的な性格だが
守銭奴な一面も。
ユーゼリカに強く惹かれている。
出生に秘密があるようで……
ユーゼリカ
本作の主人公。ある時は
大国・ツェルバキア帝国の第五皇女、
またある時は下宿の管理人さん。
次期皇帝を選ぶための
皇太子選に参加中。
エンディミオン
ツェルバキア帝国の
第八皇子。頭脳明晰な
美少年。毒舌な一面も。
アレクセウス
ツェルバキア帝国の第二皇子。
何かとユーゼリカに
構ってくる異母兄。
無敵のナルシスト。
CHARACTERS
登場人物紹介

第一章

帝国の至宝といわれる宝物の中でも、その宝石は特別だった。

青みがかった翠色。手のひらにずしりと乗る大粒。特殊な研磨によって放たれる、この世に二つとないきらめきと神々しさ。

明るい湖水のようでもあり、底知れぬ深淵のようでもある輝きは、ツェルバキア帝国皇帝レオナルダス二世の瞳の色そのもの。

皇帝になる者だけが手にすることを許されると古書に伝わる、『翠石』と呼ばれる秘宝である。

＊＊＊

「父上と同じ瞳の色――まさしく皇帝にふさわしい宝石だと思わないか？　きっとこの世のものとは思えないような、目もくらむほどの美しさなんだろうね。その持ち主と同じでね。あ、ちなみに湖水のごとき翠の瞳といえば私もそうなんだけどー。いや、別に思ってなどいないよ？　それがも

し手元にあったら、どちらが宝石かわからない……なんてね」
杯からちらりと瞳をのぞかせ、第二皇子アレクセウスが悪戯っぽく片目をつぶる。
きらめく金の髪。皇帝の子女の中でもっとも美しいといわれる容貌。赤紫の液体で満ちた杯と翠の瞳の対比はあやしく、妹に向ける表情にしては艶めいている。
向かい合って茶を飲みながら、ユーゼリカは無表情でそれを見ていた。
「あいにく興味がございません」
「宝石にかい？　まさか私にじゃないだろうね？　ハッハッハ」
「どちらもです」
「ハッハッハ。こやつめ～。世情に疎い妹に宮廷の最新情報を教えてやった兄に対して、またつれないことを言う～」
テーブル越しに額をつんつん触られ、思わず眉をひそめる。
アレクセウスが住まう雪花の宮へと、わざわざ面会申請を取り付けて訪問したのには理由がある。あるのだが、開口一番の問いもそこそこに、なぜか宝石の講釈が始まってしまったのだ。
宮廷では近頃、『翠石』と呼ばれる宝石の噂で持ちきりなのだという。皇帝になるにはそれを手に入れる必要があるだの、その宝石が皇帝にふさわしい者を選ぶだの、今は行方知れずとなっているが王者を決める時には必ず現れるはずだの、まことしやかに人々は囁きあっているのだとか。
しかしユーゼリカはそんな四方山話（よもやまばなし）を聞きにきたわけではなかった。
「それより先ほどの質問にお答えを。あの日、私にどんな贈り物を用意しておられ――」

「もちろん忘れていないぞ？　おまえも私と同じ翠の瞳だ。お・そ・ろ・いっ」
今度は鼻先をちょんと突かれた。とてもまぶしい笑顔で。
ユーゼリカは凍り付くような目で彼を見返したが、やがてため息をついた。
（全然会話にならない……）
先頃、宮殿に現れた刺客がユーゼリカを襲撃し、それを庇った第五皇子ジオルートが負傷するという事件が起きた。それ自体は襲撃を予知した上での計略といってもいいのだが、その後ジオルートが気になることを言っていたのだ。いわく、アレクセウスがユーゼリカへの贈り物を持参していたが、手違いで破損してしまいちょっとした騒ぎになったようだと。
皇族間の贈り物を直接渡すというのがまず珍しいし、その後あらためて送ってくることもない。破損したならしたで恩着せがましく何か言ってきそうなものなのに、それもない。いつも頼みもしないのに長々と手紙を寄越してくる人にしては奇妙な行動に思えた。
皇太子指名選が始まってからまもなく一年になろうとしている。三人が脱落し、候補者が減ってきた今、この美しくも脳天気な皇子にそろそろ探りを入れておくべきだと思い、訪ねたのだが――ユーゼリカが本題に入る隙も与えず歓迎会が始まり、どうでもいい噂話を山ほど聞かされ、こうしてお茶に付き合わされているのだった。
（はぐらかされているのかしら。まさか、件の贈り物とやらにそんな重要な意味があったとか？）
注意深くうかがってみるが、にこにこしてこちらを見つめている顔からはまったく本心が読み取れない。

様子見のため少し話に乗ってみるかと、仕方なくカップを置いた。
「秘宝だのと仰いましたが、そんな大層な謂われがあるのなら指名選が始まった時点で条件として提示されたはずです。それを手に入れた者が皇太子に選ばれる、と」
「まあ、一理ある」
「今頃になって話題になるのは作為を感じます。少なくとも私はその件を今まで聞いたことがありません」
「誰かが作り話を流したと言いたいのかい？」
「宮廷に流れる噂など、大抵そうでは？」
それも大多数が悪意に満ちたもの。これまでもそんな噂話のせいで何度も迷惑を被ってきた。
身を乗り出していたアレクセウスがようやく身体を引き、興味深げに腕組みをする。
「ふむ。代々の皇帝には翠の瞳の持ち主が多い。そして翠石と呼ばれるいわくのある至宝が帝国に存在する。そこを関連付けて、皇太子にふさわしいのは翠の瞳の誰かだとほのめかしていると？　しかし、私はそんな安易な手は使わないぞ？」
「私とてそうです。逆に、翠瞳の持ち主を排除する目的で誰かがやったのかもしれませんが」
現在残っている指名選候補者の中で翠の瞳を持つのは、ユーゼリカとアレクセウス。少し色味は違うが第七皇子ハルバートと第十一皇子ヘンドリックも緑がかった瞳をしている。しかしさすがにこれを武器に皇太子としての正統性を主張するとは考えづらい。
「そもそも、現在は行方知れずという話なのでしょう？　本当に帝国の至宝であるなら陛下がお探

しになっているはずですが、そんな浮き足だった話は聞こえてきません」
「そうかい？　私の耳には入っているけど。父上は以前から『翠石』をお捜しだったそうだぞ」
アレクセウスがきょとんとした顔で言ったので、ユーゼリカは思わず見つめた。
「……お耳が早いのですね」
「まあ、それが今回の噂と関係しているかは謎だけれどな」
くすりと笑って杯をあおる姿からは余裕が感じられる。日常的に噂話を取捨選択するのに慣れている人の空気だった。
当然だが彼も情報を集めているのだ。そしてユーゼリカの知らないことをとっくにつかんでいた。その情報が重要かそうでないかは別としても、優秀な『耳』が大勢いるのは間違いない。
こちらが警戒を覚えたのを知ってかどうか、アレクセウスは、ふふんと得意げな顔をした。
「やはり人望があるというのか……。ふっ、皆が私にあれこれ教えてくれるのだよ。おかげでうちの文書係も伝書係も大変だ。さらにはそれをすべて聞く私もまあまあ忙しい。こうしておまえが訪ねて癒やしてくれなければ、過労で儚く倒れていたかもしれないな……」
「さようですか。それはお疲れ様です」
「近頃じゃオルセウスも何かと言ってくるしなー。やたら情報を持っているし、何を調べているのやら」
「オルセウス殿下が？」
同い年で親しいようだが、手の内を見せ合っているのかと意外に思っていると、アレクセウスは口をとがらせた。
「皇都の内外に配下を派遣して、その対応で忙しいらしい。それであまり構ってくれないのだ。指名選の方策か知らないが、たまに酒に付き合うくらいできるだろうにさー。情報だけ寄越してきてさー」
ぐちぐち言い出したのを聞きながら、ユーゼリカは考え込む。
第三皇子オルセウスは冷静沈着で堅実な性格で知られ、特定の臣下と親しくしたり贔屓したりということもなく公平だと評判の人物だ。気弱で控えめな第一皇子と、突飛な言動が目立つ浮世離れした第二皇子がいるからか、彼に期待を寄せている宮廷人も少なくないと聞く。ユーゼリカももし皇太子に選ばれるなら彼ではないかと考えたこともある。
そのオルセウスが、皇都内外に人をやって何か探っている。指名選の方策だとしたら随分手広くやっているということか。
（他の皇子たちは商売や貿易を始めたと聞いているけれど、オルセウス殿下についてはまだわからない。まあ、探りを入れても答えてくれそうな人ではないわね。アレクセウス殿下の『耳』はそれをつかんでいるのかしら……）
ちらりと見てみると、アレクセウスと目が合った。
途端、むくれていた顔にみるみる笑みが満ちた。はねるように席を立って側に来たかと思えば、がしりと肩を抱かれる。
「まあいいか！　私にはおまえがいる！　こんなめでたい日に恨み言を言うのはよそう。何しろ今

日は、おまえのほうから会いたいと手紙を寄越してくれた祝祭なのだから！」
冷ややかに見上げる妹をものともせず、アレクセウスは夢見るように瞳を潤ませている。
「手紙を読んだ時の私の感動がわかるかい？　手はぶるぶると震え、視線はおろおろとさまよい、頭の中をこれまでの苦労が駆け巡った……。ようやく私の愛が伝わったのだと思うと自然と涙があふれ、歓喜のあまり全身の力が抜けてその場に倒れてしまったよ。ははは、繊細な兄をこんなに喜ばせるとは、いけない妹だな。よし、今夜は宴だ！　おまえの席は私の隣ね、決まり！」
「……」
つん、と頬を突かれ、暑苦しさにうんざりしながらも、ユーゼリカは悟った。
（やはりまともに話ができる人ではない……。これ以上は時間の無駄だわ）
はぐらかしているのか、それとも本気で浮かれて聞く耳を持たないのか。
どちらにせよ、一刻も早く退散しなければ強引に宴に付き合わされそうだ。

「結局、お答えいただけませんでしたね」
宴を開く気満々のアレクセウスに別れを告げ、さっさと玄関を出てきたところで、従者のキースがそっと話しかけてきた。
馬車の待つ門へと歩きながらユーゼリカはため息をつく。贈り物の件以外にも聞きたいことはあったのだが、何の成果もなかった。

「こうなりそうな予感はしていたわ。あの方を探ろうとした私が間違っていたのよ」
「まあ、裏表なんてなさそうな御方ですしね……」
なんともいえない顔つきでキースがぼやく。彼もアレクセウスとのやりとりを見ていたのだ。
ユーゼリカは違う感想を持った。裏表のない人間などいない。アレクセウスも例外ではない。
「ああ見えて、彼も裏では人を動かしているのよ。それをすべて隠してのあの態度なのだとしたら……怖い方だわ」
先ほどはオルセウスのことを言っていたが、アレクセウス当人も各地に配下を派遣しているようだと報告が来ている。ただ、彼がどんな方策をとろうとしているのかはまったくわからない。
これまでは普段の言動を見て、理解できないとただ冷めた感情を抱いていた。だがこうして私宮を訪ね、彼の生活状況や素の人となりを探ろうとしても、何もつかめない。不思議な人だと思っていたが、もはやそれだけでは済まされないと感じる。
（あの陽気な方が住む宮殿が、こんなに静かなのも意外だし……）
足を止め、ゆっくりとあたりを見回してみる。
薄色の空の下、そびえ立つ白い城館。石敷の専用路は汚れ一つない。庭にも通路脇の生け垣にも綿毛のような純白の花がところ狭しと咲きこぼれ、まるで雪景色の中にいるようだった。
華やかで、清らかで、すがすがしく――なのになぜか、寂しいような。
ふと視線を感じ、ユーゼリカは顔をあげた。
三階の窓の一つ、カーテンが半分引かれたそこに人影があった。

白いドレス姿で、髪は結わずに下ろしている。遠目からでも高貴な女性であるのがわかった。
驚いて目を凝らした時、人影はすっとカーテンの向こうに消えてしまった。
まるで亡霊かのような存在感に意表を突かれたが、すぐに表情を戻す。
あれはおそらくアレクセウスの母妃だ。もう何年も体調が優れず私宮に閉じこもっていると聞いたことがある。
「姫様……」
「――ええ。行きましょう」
同じく目撃したらしいキースの固い声に、うなずいて踵を返した。
この宮殿の寂しげな雰囲気に納得がいく一方で、アレクセウスの底抜けの明るさが一層理解不能に感じられた。

誰が付き合うかと言わんばかりに宴を蹴ってユーゼリカが出て行ってから、アレクセウスはしばし一人で酒杯を傾けていた。
相変わらずのつれなさだった。異変を感じ取って訪ねてきたようだが、よもや隣室に続く扉の向こうにとびきりの〝秘密〟が隠れていたとは思いもしなかっただろう。葡萄酒を飲み干し、つい口元が緩んだ。
「もういいぞ。出てきたまえ」

呼びかけてやると、ややあって扉が開いた。
室内をうかがうようにフィルが入ってくる。前髪を上げて後ろへ流し、眼鏡をかけたいつもの姿だ。顔色が悪いのは、二人で話している最中にユーゼリカが訪ねてくることになって肝を冷やしたせいだろう。
「心配しなくていい。君に気づいた様子もなくいつもの調子で帰って行ったよ」
「……はい」
思い詰めた様子で窓のほうを見ている。これで一安心、など呑気にとらえられないようだ。
気づかれなかったのが〝今〟ではなかったというだけで、いつその日が来るかと恐れている。素性を隠して生きてきた彼がずっとそうして張り詰めていたのと同じように。
「あれからユーゼリカとは会ったか？」
アレクセウスの問いに、フィルは硬い顔で首を振った。
「いいえ。下宿には一度行きましたが、リリカさんは……皇女殿下はおいでではありませんでしたから。お話もしていません」
あれから――つまりは彼の住む下宿館の管理人であるリリカと、ユーゼリカが同一人物だと知った夜から、彼の世界は一変した。
おそらくは彼にとって翼を休める場所であり、本当の自分を忘れて過ごせる相手だった。だが今となってはもう心を許せまい。ユーゼリカはツェルバキア皇女であり、彼の故国はツェルバキアによって滅ぼされている。彼女自身に恨みはなくても複雑な思いはあるだろう。

「近頃はユーゼリカへの監視が緩んでいるから近々下宿へ行くはずだ。わだかまりはあるだろうが、我慢して接触してくれ」
「わだかまりなんて……」
「ないのか？」
フィルは口をつぐみ、細く息をつく。
「皇女殿下に対しては、何も。ただ、どんな顔をしてお会いすればいいのか迷っています」
「同じでいいじゃないか。今までどおり、フィル・ウェルフォードという男を演じれば」
フィルが何か言いかけ、目を伏せる。
そのまま黙り込んだ彼をアレクセウスは見ていたが、おもむろに腰を上げた。
「セフィルティウス」
はっとしたように顔を上げた彼を、正面から見据える。
「『翠石』は我々が手に入れる。そのためにユーゼリカを攻略するのは必須だ。以前の君ならまたとない好機だと思ったはず。今は違うのか？　良心が痛むとでも？」
「……」
「何も森緑の宮に潜入しろと言っているわけではない。下宿でそれとなく話を持ちかければいい。さっき『翠石』についていくらか吹き込んでおいたから、彼女も少しは情報を集めるだろう。そこから手がかりを捜す。――難しいか？」
フィルは目を合わせたまま黙っている。これしきのことをなぜためらうのか、彼自身が己に問う

ているようだった。わずかに寄せた眉間から葛藤が見て取れる。
やがて彼は息をつき、表情を緩めた。覚悟を決めたとも、諦めたともとれる微笑だった。
「わかりました。では――今までどおりに」
フィル・ウェルフォードを演じます、と。
アレクセウスはうなずき、再び椅子に腰を下ろす。彼が承諾したのならこれ以上は何も言うつもりはなかった。
話がついたところでちょうど扉が開き、配下が二人入ってきた。それぞれ弟皇子たちを探らせている者たちだが、どちらも張り詰めた顔をしている。
彼らから報告を受けたアレクセウスは、意表を突かれ、思わず天を仰いだ。
「どうなさいました？」
訝しげに見ているフィルに、唇の端をあげてみせる。
皇太子指名選が、また動いた。自分のあずかり知らぬところで。
「さて。随分と急な嵐が来そうだ」
誰の仕業なのかまでは確定していない。黒幕はまだ尻尾を見せていない。
今わかっているのは、これから宮廷が荒れるだろうということだけだった。

＊＊＊

最後に席についた第八皇子エンディミオンは、きょとんとしてテーブルを見渡した。
「あれ？　なんだか今日は少なくない？」
定期的に開かれる皇太子指名選立候補者の茶会の日である。規則に反していないかなど誓約書の確認をし、円卓にて会談するという集まりだ。十一人が立候補し三人が脱落したので、八人が出席するはずだが、空席が目立つ。
「ねえユーゼリカ、みんなどうしたの？　欠席？　こんなの初めてだよね」
「風邪でも引いたんじゃないかしら。近頃寒いから」
隣からのぞきこまれ、茶を飲んでいたユーゼリカは当たり障りなく答えた。こちらだって来たばかりで事情など知らないのだ。
「ええ～、三人一緒に？　そんなことってある？」
「じゃあ時間を間違えて遅刻しているのかもしれないわね」
「それも三人一緒に？　さすがにないでしょ。周りが忘れるはずないもん」
「急な公務で出かけているのかも」
「公務って何さ。みんな役職にもついてないのに」
「うるさいぞ！　黙って待てないのか」
第六皇子のアルフォンスが苛々した声で割り込んだ。憎らしげににらんできたが、しかしエンディミオンは堪えていない。
「だって気になるでしょ？　そうだ、暇つぶしに遅れてる理由を賭けてみません？　ぼくはね、

『来る途中で馬車が壊れたから今必死に走って来てる』に一万クライン！」
「馬鹿か。それこそ三人同時に壊れるわけがないだろ」
「ひどーい。せっかく賭け事大好きなアルフォンス兄上に合わせて提案してあげたのにー」
エンディミオンが唇をとがらせ、アルフォンスは舌打ちしてそっぽをむいた。苦虫を噛みつぶしたような顔で、卓上をせわしなく指で叩いている。
「えっと、じゃあ私は、『宮廷の淑女たちに私への恋文を渡すよう頼まれたけれど、あまりの量の多さに行き倒れてしまった』に十万クライン！」
「それ本当にありそうで怖いんですけど～」
アレクセウスが目をきらめかせながら挙手し、エンディミオンがけらけら笑う。
向かいの席では、オルセウスが我関せずといった様子で腕組みし、目を閉じている。今のところ出席しているのはこの五人のみだった。
遅刻でも欠席でもいいから、とりあえず今いる面々で進めてくれないだろうか。早く帰って下宿に向かう準備をしたいのだが――などとユーゼリカが考えていると、ふいに扉が開いた。
進行役の内務大臣が入ってくる。彼が一人ずつ質疑した後、別室で誓約書の更新をするのがいつもの流れなのだが、今日は様子が違っていた。
「皆様、お待たせして申し訳ございません。緊急の用件が入りまして……」
「大丈夫だよ。まだ来てない人がいるし」
エンディミオンが取りなしたが、内務大臣は浮き足だった様子でしきりに額をハンカチで拭って

いる。
「実は、その件で皆様にお知らせがございます。いらしていないお三方ですが、その……」
「何？　欠席？　それとも特殊な事情による遅刻？」
「やはり私への恋文が絡んでいるのか？」
目を輝かせて身を乗り出すエンディミオンとアレクセウスに、困惑の視線をやった内務大臣だが、ぐっと厳めしい表情になると口を開いた。
「……第七皇子ハルバート殿下、第十皇子ルスラーン殿下、第十一皇子ヘンドリック殿下。以上のお三方は、皇太子指名選の規則に抵触したとの判断が下され、失格となられました」
しん、と場が静まりかえった。
全員が唖然として動けなかった。誰か一人ならまだしも三人同時とは。先ほどの冗談めいた会話の続きみたいだ。もちろん内務大臣がそんな悪ふざけをするはずもない。
「抵触の理由は？」
「三人一緒に？　どういうこと？」
ユーゼリカとエンディミオンが矢継ぎ早に訊くと、大臣は疲れた表情で手元の書簡を開いた。
「ハルバート殿下は医療体制の確立と施設の建設を手がけておいでしたが、施設を作るにあたり土地や建物を強引な手段で獲得なさったそうで、被害に遭ったという者たちが訴えています。よって、民を虐げてはならないという規則への抵触です。ルスラーン殿下は他大陸との貿易拡大を図っておられたところ、取引相手の商人や豪族に対しツェルバキア皇族の名を出した上で無理な条件を

強要なさったとのことで、多数の苦情が寄せられています。よって、皇族の名を汚してはならないという規則への抵触です。ヘンドリック殿下はルスラーン殿下と同じく他大陸へ貿易進出をなさっておられましたが、それに伴い武力行使して他国の領土を侵害した疑いで激しい抗議が来ております。こちらは国家間の問題になりますので、皇籍剥奪の処分が下されました」
内務大臣が重苦しく言い終えると、あちこちから嘆息が漏れた。
ただ単に失策したというだけではない。帝国と皇帝の顔に泥を塗ったのだ。これから宮廷をあげて尻拭いをしなければならず、内務大臣の顔色が悪いのもうなずけた。皇子たちの後見である諸侯も重い責任を問われるだろうし、場合によっては帝国内の権力の均衡がゆらぐかもしれない。
「予想よりだいぶひどいね。可愛い顔してそんなことやってたんだ」
エンディミオンがつぶやく。ユーゼリカは黙っていたが、内心同意見だった。
失格になったのは年少の皇子ばかり。特に下の二人はまだ子どもといっていい年齢だ。貿易に手を出しているのは把握していたが、まさか他国相手にそんなことをやらかしていたとは。
（本人というよりは後見役が早まったのかもしれないけれど。それにしてもやりすぎたわね）
そのせいで末弟のヘンドリックは皇籍剥奪されたという。生意気でしょっちゅう噛みついてくるのを鬱陶しいと思っていたが、さすがに今はいろんな意味でショックだった。
「医療の確立と他大陸との貿易か。方策は良かったのに」
珍しくアレクセウスがしんみりしている。
隣のオルセウスは無言だった。暴挙を起こした弟たちに思うところがあるのか、突き放したよう

な冷たい表情だ。
早くも驚きから立ち直ったらしいエンディミオンが、円卓に身を乗り出した。
「三人は今どうしてるの？　まさか皇宮追放とかないよね？　ベルレナード兄上みたいに」
無邪気な問いに、アルフォンスがぴくりと反応する。
親しかった第四皇子ベルレナードが母妃や後見役もろとも皇都を追放された事件から、まだそう日が経っていない。みるみる険しい顔になってエンディミオンをにらんでいる。
「私宮にて待機命令が出されております。調査が進めばさらに罰が下るやもしれませんが、今のところは……」
「そっかぁ。かわいそうだけど仕方ないよねえ」
うんうんとうなずく彼に、尖った声が叩きつけられた。
「随分と機嫌がいいじゃないか。三人減ったのがそんなに嬉しいか？」
皮肉を通り越して敵意に満ちた口調で言ったのはアルフォンスだ。エンディミオンはあっけらかんとしてそれを受け止めた。
「そりゃあそうですよ。アルフォンス兄上だってそうでしょう？　あとはここにいる皆さんが自滅してくれたらもっといいんですけどね」
「なんだと！」
「冗談ですよぉ。――でも不思議ですよね。同じ頃合いで三人一緒にやらかすものかなぁ。今までの三人は宮廷の中でのことが理由だったからわかりやすかったけど。ねえユーゼリカ、どう思う？」

指を顎に当てて小首をかしげたエンディミオンに、ユーゼリカは視線も向けず応じる。
「私に聞かれても困るわね。あなたと同じ情報量しか持っていないから」
「あはっ、それもそっかぁ。前の三人の時はみんな君が関わってたから、気になっちゃってさ」
アルフォンスが、はっとしたようにこちらを見た。そういえばという顔でアレクセウスが、無表情のままオルセウスが、同様に見る。
ユーゼリカは冷ややかにエンディミオンを一瞥した。まったく、余計なことを言ってくれる。
すでに指名選から外れたベルレナード、第一王子エレンティウス、第五皇子ジオルートの三人について、失格や辞退の経緯に関わったのは事実だ。だが結果としてそうなっただけで故意に陥れたことはない。
「私が策を弄して皆を蹴落としたとでも？　あなたと違って後ろ盾も財産もないのに、できるわけがないでしょう。大陸を出てまで探りに行かせるほど手数に余裕はないわ」
「わかってるってー。冗談だってば」
天使のごとき笑顔で受け流された。こうして引っかき回すのが好きな人だが、今は迷惑としか言い様がない。本気に取る人がこの場にいるのをわかっていて言ったのだ。
逆恨みを暴走させられたら困る。なるべく冷静に付け加えた。
「そもそも先のお三方の件も、私が悪意を持って引きずり下ろしたわけではないわ。恨まれる筋合いはないと思うけれど」
それはアルフォンスに向けた言葉だった。もともと好かれてはいなかったが、ベルレナードが失

脚し皇都を追われ平民となったのをユーゼリカのせいだと決めつけているのだ。
「ですって。アルフォンス兄上」
エンディミオンに楽しげにのぞきこまれ、アルフォンスの目に殺気が宿った。
ユーゼリカは思わず身構えたが、意外にもオルセウスが間に入ってきた。
「意味のない諍いはよせ。時間の無駄だ。――緊急だというのなら今日はもう散会にしては？」
その言葉にエンディミオンは「はーい」と間の抜けた返事をし、アルフォンスは噛みつきそうな目でにらみながらも引き下がった。内務大臣も、ほっとした顔になる。
「恐れ入ります。ではそのようにいたしましょう」
誓約書の更新はまた後日あらためてということになり、茶会は閉会となった。
待っている間に従者たちも聞き及んだのか、回廊は浮き足だった雰囲気がただよっている。会場を出たユーゼリカは足早に通り抜けようとしたが、後ろから呑気な声に呼び止められた。
「待ってよー、ユーゼリカ。せっかく早く終わったんだから、一緒に作戦会議でもしようよ」
エンディミオンだ。思いがけない展開になってうきうきしているのを隠してもいない。
ユーゼリカは足を止めなかったが彼は構わず並んでついてきた。
「私を悪者にしようとした人と、何の作戦を練れというのかしら」
「だからごめんってば。みんなぴりぴりしてたでしょ、空気を和ませようとしただけなんだって」
「あなたが煽ったせいでアルフォンス殿下に火がついたのに、記憶でも失ったの？」
「そんなに怒らないでよー。正直言ってぼくもびっくりしてるんだ。軽口でも叩かなきゃやってら

れないんだもん」
あれは軽口の域を超えていたが、と思いつつ冷たい視線を浴びせてやると、彼は表情をあらため、顔を寄せてきた。
「で、誰の仕業だと思う？」
「誰かが故意にやったと本気で思っているの？　三人同時に？」
「少しずつ人数が減ってきて、ここで一気に弟たちを蹴落とせばあとが楽になる――そう考えた人がいても不思議じゃないでしょ。あの方たちならそれをやるだけの人脈も財力も持ってるし」
ちらりと彼が背後を見やる。つられて振り向くと、会場から出てきた三人の兄たちもちょうどこちらに気づいた。アレクセウスはにこやかに手を振り、オルセウスは一瞥しただけで従者とともに去って行き、アルフォンスは険しい顔でにらみつけてくる。いつもと同じ態度だ。
ユーゼリカは隣に目をやった。
「あなたが首謀者という可能性もあるけれど？」
彼の後見人であるアッシュフォード候は皇帝の側近であり、大陸北部から中部にかけて地盤を持つ富豪でもある。いくらでも彼のために働くはずだ。
ふふ、とエンディミオンが微笑む。
「君かもしれないしね？」
ユーゼリカはうんざりして息をついた。作戦会議だの言ってきたのは探りを入れようとしただけか。

「本当にそんな暇がないの。誰かの粗探しをして弾劾するより自分の方策で精一杯よ」
「ぼくだってそうさ。狩りに行ったり領地に遊びに行ったり忙しいよ」
「優雅でいいわね」
適当に返しつつ一瞥する。確かにこれまで調べた限りではそういう動きが多いようだ。そしてまだ方策はつかめていなかった。母妃と後見役への義理で立候補したように言っていたが、案外事実なのかもしれない。
「まあとにかく、お互い気をつけようってこと。明日は我が身だよ」
もっともらしく指を立てて言うと、「じゃあね！」と彼は笑顔で去って行った。
かと思ったら、残っていたアレクセウスとアルフォンスに話しかけている。同じように探りを入れるつもりかもしれない。
憎らしげに見ていたアルフォンスがこちらに来そうなそぶりをしたので、ユーゼリカはさっさと立ち去ることにした。
「エンディミオン殿下の仰るように、どなたかの陰謀なのでしょうか？」
お供をしていたキースが深刻な顔になっている。今回は免れたとはいえ、次に方策を暴かれるのは主かもしれないと心配のようだ。
それを聞いてしばし考えた。暴かれたところで不正はしていないから失格になることはないのだが、店子たちに迷惑や危険が及ぶ可能性はある。その対策はしておかなければ。
「念のために下宿館の警備を強化しましょう。もしもに備えて避難することも考えておかないと。

すぐに押さえられそうな借家を探しておいてくれる？」
「わかりました。ロランにも警戒を促しておきます」
従者のロランは下宿館に常駐している。異変があればすぐ連絡が来るはずだ。
他に配下の騎士たちを交替で館周辺の警備にあたらせている。公道から少し入った場所にあって目立たないし、障壁に守られていることもあり、これまで不審な者が近づいたことはなかった。
だがこの先はわからない。三人の失格者の件、本当に誰かが陥れたのだとしたら――大陸の外にまで調べをやり、証拠を集めて弾劾した。かなり鼻がきき、抜け目のない人物ということになる。
ざわついたものを覚え、ユーゼリカはこくりと唾を飲んだ。
「私もあちらへ行くわ。今ならまだ警戒されていないから動ける。急いで支度をお願い」
以前は厳しい監視がついていたが近頃は止んでいる。だが今回の件でまた互いを見張り合うことになるだろう。その網が張り巡らされる前に皇宮を抜けなければ、当分身動きがとれなくなる。
足早に私宮へ向かいながら、言い知れぬ不安が胸に広がるのを感じていた。

苛々しながら馬車に揺られていたアルフォンスは、緩やかに減速したのに気づき、いぶかしげに顔をあげた。
茶会が開かれた本宮殿から私宮に戻るところだが、まだ距離があるはずだ。何事かと思っていると、外から従者の声がした。

「殿下、ハルバート殿下の馬車です。降りてこちらに来られるようですが」
いかがなさいますか、という問いに重なり、刺々しい叫び声が叩きつけられた。
「アルフォンス兄上！　後ろ暗いところがないのなら降りて質問にお答えいただきたい」
当てつけるような口調には怒りがにじんでいる。
つい先ほど失格になったと聞いたばかりの弟に、こんなふうに待ち伏せを受ける心当たりはない。行く手を遮られた苛立ちもあり、アルフォンスは勢いよく扉を開けた。
「なんの用だ！　無礼だぞ」
怒鳴りつけてやったが、歩いてきたハルバートは意に介した様子もなく、殺気だった顔でにらみつけている。
「時間がないので単刀直入に伺います。私を陥れたのはあなたですか？」
「……なんだと？」
「医院の建設予定地も医療庁の設立計画も、きちんと対価を払い契約を交わしてやったものです。それがなぜ別の書類とすり替わっている？　取引相手がこぞって訴えてきたのはなぜだ？　全員私が知る契約者じゃない。もとの土地所有者をどこへやった？」
いつも陰気なくらいおとなしい、それでいて皮肉屋の弟が、面影もないほど血相を変えてまくし立ててくる。その勢いにも呑まれ、アルフォンスは呆気にとられてしまった。
「おまえ、何を言っている？」
まったく意味がわからない。自分は一体何の因縁をつけられているのか。

ぽかんとした表情を見てとったのか、ハルバートは口をつぐみ、嘆息して横を向いた。
「あなたではないのか……。確かに、あれは相当頭の切れる者の仕業だものな」
「おい！」
馬鹿にされたと察して気色ばんだものの、アルフォンスはすぐに表情をあらためた。
「待て。不正をしたとしか聞いてないが、違うのか？」
「不正？　冗談じゃない。そんなことをすればすぐ父上に露見するというのに、やるはずがないでしょう。皇族の品位を落とすまいと細心の注意を払って、土地を買うにもむしろ相場よりはずんでやったくらいなんだ。それを、はした金で無理矢理売らされただのと……。道理で事が順調に進みすぎると思いましたよ」
「……つまり、やってないのか？　本当か？」
ハルバートは深々と息をつき、暗い目をして吐き捨てた。
「罠だったのですよ。方策を立てて動き出したらとんとん拍子に土地や建物の情報が舞い込んできた。つてがあるので交渉を手伝わせてくれと役人がやってきて、つい信じてしまった。あれは全部誰かが送り込んだ刺客だったんだ。でなければこんなにすべてをひっくり返せない」
「……」
「ルスラーンとヘンドリックも失格になったそうですね。おそらく二人も同じ目に遭ったのではないですか。あの二人に大陸外への進出なんて大それたことができるわけがない。うまく何者かにお膳立てされ、母君や後見人が乗せられたんでしょう。罠だとも知らずにね」

アルフォンスは黙り込んだ。――すっ、と腹の底が冷えた気がした。
やはりそうなのか？　誰かの陰謀？　だとしたら、次に犠牲になるのは。
自分以外の四人の顔が浮かぶ。あの中にそんな狡猾な者がいるのか。一体誰だ？
「あなたでないなら結構です。他の方にも確認したいので、これで失礼しますよ」
言うだけ言うと、ハルバートは振り返りもせず行ってしまった。彼が乗り込んだ馬車が慌ただしく発車し、すぐさま遠ざかっていく。
アルフォンスは呆然としてそれを見送ってから、急いで馬車の扉を閉めた。
「出せ！　早くしろ！」
うわずった怒鳴り声に驚いたように、馬車が大きく揺れて動き出す。それに文句をつける余裕もなかった。座席にもたれ、頭を抱える。
（嘘だろう？　ハルバートの勘違いじゃないのか？　あの四人の、誰かが……）
へらへらして自分を演出することしか考えていないアレクセウスではないだろう。エンディミオンだって似たようなものだ。性根の悪さでいつも引っかき回すが、あれはまるきり子どもだ。
オルセウスは切れ者と評判だが、母妃の生家はそれほど有力者ではないし、他大陸まで人をやって調査する余裕があるとは思えない。その点でいえばユーゼリカも同じだ。
しかしハルバートの言い分が当たっているなら、あの中に本当の顔を隠した謀略家がいることになる。
自己愛主義も、無邪気さも、裕福でないのも、すべてが仮の姿だったら？　馬鹿を装い、子どものふりをし、ひそかに莫大な財産を隠しているだけだったとしたら？
（くそっ！　一体どいつだ！　次は私を狙うつもりか!?）
アルフォンスは指名選の方策として商売を始めたが、すでに一度失敗していた。母の故郷には大きな港湾都市があり、そこに入ってくる他大陸からの品物を皇都に流通させようとしたのだが、うまくいかなかった。東の大陸から唯一そこにだけ入るという船団がおり、彼らの持ち込むものがかなり貴重だからと、母が諦めきれず、もう一度商売を興そうとしていた矢先なのだ。
そこに何か落ち度があるとして弾劾されでもしたら。いや、もしやあの船団そのものが罠だった可能性はないだろうか。
（どうする……！　せっかくここまで残ったんだぞ、脱落などするものか！）
思わず髪をかきむしる。こんな時、誰に相談すればいいのかわからない。
頼もしい存在だったベルレナードはもう皇宮にはいない。他に親しい者など――いや、誰が敵かわからないのだから不用意に話を持ちかけるのは危険だ。
（兄上がいれば……。ああ、くそっ、それもユーゼリカのせいだ！　あの女狐め！）
ベルレナードが皇都を追われたことには同情するが、彼と同じ目に遭うのは絶対にご免だ。
この瞬間も狙われているのではと、焦りと警戒も相まって全身が奇妙に高揚する中、ようやく私宮にたどりついた。アルフォンスは周囲を何度も確認しながら足早に宮殿へと入った。
このまま酒でも飲んで気晴らししたかったが、東から来る船団のことを思い出し、執務室へと向かう。念のため現地に確認させるよう指示をしたほうがいいかもしれない。

「お帰りなさいませ、殿下。こちら本日分のお手紙です」
従者が差し出した箱にいくつか書簡が入っている。機械的にそれらをつかんで目を通そうとしたが、一通だけ差出人のない封書があるのに気づいた。
「誰からだ？」
「中にもお名前はありませんでした。皇女殿下に関する調査結果のようですが」
ベルレナードが皇籍剥奪されて以降、とばっちりを食らうまいとユーゼリカを調べさせるのも中止している。報告書があがるはずがない。アルフォンスは眉を寄せ、急いで中身を開いた。
そこには思いがけない文言が並んでいた。

〈ユーゼリカ皇女は皇都の丘陵地に別邸を有しています。
ひそかに精鋭を集め各候補者を探らせている模様です。失格となった方々の情報を集めていたことを確認しました。
次の獲物についても調べを進めているようです。
いつまで放置するつもりですか？〉

ぞわっ、と悪寒が走った。
便箋には別紙の地図が添えてあった。震える指でそれをめくる。
弱みをつかもうといくら調べてもわからなかった。母親の形見の館も無人だったし、郊外の土地

も荒れていた。何日も尾行したのにいつもまかれた。
「道理で……あんなに必死になっていたわけだ……！」
やはりあの女が黒幕だった。ベルレナード、エレンティウス、ジオルート、そして今回のハルバート、ルスラーン、ヘンドリック――全員を失脚させ、さらに次の標的にも迫っているという。なんと恐ろしい女だろう。
ぐしゃりと地図を握りつぶす。アルフォンスは怒りにたぎる目で宙をにらんだ。
これ以上好きにさせてはならない。やられる前に、あの女を殺すのだ。

＊＊＊

茶会から森緑の宮に戻ったユーゼリカを、ハルバートからの面会申請が待っていた。
失格になった経緯や詳細を知りたかったので、すぐに日時の調整をした。しかし返事を待っている間に彼は謹慎を言い渡されてしまい、結局会うことはできなかった。
彼だけでなくルスラーンとヘンドリックも同じ処分を受けたようだ。それで接触するのを諦めた。情報が欲しかったが仕方がない。
そして、相変わらずというのか、この件に関して父帝が声明を出すことはなかった。
「殿下方も同時失格の件をお調べになるのでお忙しくて、姫様の監視どころじゃないのでしょう。おかげで尾行もなく抜け出せました」

馬車に揺られながら考え込んでいるユーゼリカに、キースが慰めるように言う。
彼の言うとおり、私宮周辺も皇宮の門までの道も見張られてはいなかった。おそらくどの陣営も三人が失格になった背景を探るのに現地へ人を派遣したりで、それどころではないのだ。現にあの茶会から二日経つが、こちらに目を向けている気配はない。
「そうね。でも念には念を入れて行動しましょう。街中に尾行部隊がいないか確認して。安全が確定するまで数カ所寄り道をしてちょうだい」
「御意」
キースが御者に指示を出すのを聞きながら、窓のカーテンをそっとずらしてみる。
外を流れる景色はすでに灰色まじりの冬だった。色づいた街が秋祭りで賑わっていたのはついこの間なのに、季節の移ろいは早い。
花びらが舞い、音楽で彩られた優雅な舞台で、店子のアンリが新劇団設立のお披露目をした日が遠い昔のようだった。実際にはまだ一月（ひとつき）と経っていないのに。
（アンリさんは劇団設立のために忙しくしていらっしゃるようだし、他の皆さんも協力してくださっている。安心して励めるように、早めに対策しておかなくては）
店子の安全に配慮するのは管理人の使命だ。ましてや皇女である自分の事情で危険にさらすなどあってはならない。
馬車は教会とアカデメイアに立ち寄り、わざと遠回りをさせたりもしたが、やはり尾行の気配はないようだと御者と従者から報告があった。

「そろそろ館にまいりますか？」
キースの問いに、外を見ていたユーゼリカはふと気づいて答えた。
「八番街が近いわよね。少しだけ寄ってくれる？」
「わかりました。八番街のどちらへ？」
「秋祭りの時の、青い泉を見てみたいの」
それを思いついた時、特に意味があって言ったわけではなかった。ただなんとなく、あの時の光景が思い出されただけで。
八番街へ向かった馬車は、アンリをお披露目した広場を通り過ぎ、奥まった林へ入った。
あの日は露店がいくつも出ていて賑やかだったが、今は閑散としている。地元の住人らしき男女が散策しているのみで、木々は葉を落とし、寂しげな風景が広がっていた。
馬車を降りると、泉の周りに人影がないのを確認し、そちらへ向かう。
青い水底には無数の硬貨が散らばっていた。恋愛成就を願って投げ入れた硬貨は、それが叶う時に神様が対価として受け取るため消えてしまう――という筋書きだそうだが、今年はまだ回収していないようだ。
「お足元にお気をつけて」
「ええ、平気よ」
落ちたところでたいした深さではないが、従者たちが気をもんでいるので慎重に移動する。
冬の澄んだ空気と、時折聞こえる鳥の声。はばたきに思わず頭上を振り仰ぐと、白い吐息がふわ

りと流れた。冷たい風が吹き、頭の中がくっきりと晴れるような感覚がする。
三人の皇子の失格の件も、店子の今後のこともどちらも気になって悶々としていたが、景色を眺めていると自然と秋祭りのことを思い出した。
（あの時投げたのは……どのあたりだったかしら）
あの日、フィルの手からこぼれ落ちた硬貨。あれは事故だったのか、それとも故意によるものだったのか、結局わからずじまいだ。
けれどもあの後、硬貨がどうなったか一緒に見に行かないかと誘ってきた彼は、緊張しているようだった。笑顔で取り繕うことなく、おずおずといった口調で、こちらの反応を気にしながら――あれが彼の本心を表していたのではという気がしていた。
（……別に、だからといってどうということはないけれど。一緒に行こうと誘われただけだし）
なぜか居心地の悪さを感じ、泉から目をそらす。
永遠の愛など信じていないと言った時、いたたまれず逃げてしまった自分をフィルは追いかけてきてくれた。愛を信じられなくてもいいからこれからも話をしてほしい、味方でいるからと言ってくれた。
あの言葉が、ただ愛を告白されるよりも嬉しかった。
彼がいい人だから優しさをくれただけなのか。店子と管理人としての信頼関係のなせるわざか。それとも他の理由があるのか――。
水面を渡ってきた風が髪を吹き上げた。誰を思ってぼんやりしていたか気づき、思わず頭を振る。

（変なふうに考えてはだめ。迷惑になる。管理人の分を超えてはいけない）
ここにいるから妙な思考に陥るのかもしれない。もう立ち去ろう。
ユーゼリカは急かされるように踵を返したが、いくらも行かないうちに足を止めた。
こちらに向かって遊歩道を若者が歩いてくる。濃灰色の外套姿に見覚えがあった。
「あれ……、奇遇ですね。こんなところで」
驚いたように会釈したのは、なんとフィルだったのだ。
「どうしてこんなところにいるの？」
思わぬ登場に動揺し、自分のことは棚に上げて聞いてしまった。しかし彼のほうもどことなく浮き足立った様子だ。
「ええ、まあ……、泉が気になって思わず来てしまって」
「あなたも？」
驚いて聞いたユーゼリカに、フィルが目を瞬く。
「じゃあ、あなたも？」
沈黙が落ちた。見つめ合った二人は、どちらからともなく目をそらした。
なんだか気まずい。一緒に見に行こうという約束がこんな形で叶うことになるとは。
ユーゼリカは咳払いした。やましいことはないのだから堂々としているべきだ。
「残念だけれど、どの硬貨かわからなかったわ」
フィルが風で乱れた髪をかき上げ、泉を見る。

「本当だ、たくさんある。まだ神様に通じてないってことですね」
声が少しうわずっている。水底に目を向けたきり、こちらを見ようともしない。
彼も気まずいのかと思って窺ってみると、まなざしは憂いを帯び、物思いに沈んでいるようだった。
「どうかなさったの？　いつもの元気がないみたい」
フィルが我に返ったように口元を押さえる。
「緊張しているだけです。あなたと会ったから」
「……今までも会っていたけれど」
「そうですけど、久しぶりですし、下宿以外の場所で会うといつもと違う感じがするというか」
返事はするもののまだこちらを見ない。頑なに思えて不自然に感じた。
「何か悩み事？　そんなに泉ばかり見て思い詰めた顔をなさって」
フィルの表情が一瞬強張る。自分でもわかったのかごまかすように笑った。
「いや、違います。泉があんまり綺麗で。目がそらせないだけです」
ユーゼリカは水面に目をやった。珍しい青い色で確かに綺麗だが、そんなに見とれるほどだろうか。
「この前と変わりないように見えるけれど」
「すごく綺麗ですよ。あの水面の色……まるで……宝石みたいじゃありませんか」
やけにもったいぶった言い方に首をかしげつつ、ユーゼリカはもう一度水面を見た。

「そう言われれば、そう見えなくもないかしらね」
「綺麗です。ああいう宝石があったらほしくなりませんか？　今日のドレスに似合いそうですよ」
ユーゼリカは三度水面を見やり、自分の服を見下ろす。今は管理人の姿だ。侍女のお下がりの色あせた紺色のドレスである。
（いつもより地味な服なのだけど、本気かしら……）
皇宮でのドレスならいざ知らず、彼の審美眼が少し心配になりながらも、真顔で答える。
「宝石には興味がないの。必要もないからあまり持っていないし」
宴や夜会に出る機会もないし、倹約もしたいしで自分で買い求めたことはない。ほしいとも思わなかった。
フィルが意外そうにこちらを見る。泉への関心はようやく解けたらしい。
「そうなんですか？」
「ええ。ほとんど付けたこともないわ」
「でも……てっきりたくさん持っているのかと。……お父上から贈られたりするでしょう？」
「全然よ。並外れた吝嗇家だから」
贈られるどころか、母の形見の宝石箱からいくつも取り上げられた。いつの間にかなくなっていたりして、気づいて愕然としつつも皇帝相手に確認できず、それきりだ。
フィルはなんともいえない顔つきになっている。金持ちの娘と説明していたから信じられないのかもしれない。

「吝嗇家……。それにしたって、一つも贈らないのは筋金入りですね」
「贈ってきたところでいらないからいいのよ。母の形見のものがいくらかあるけれど、それも使わないもの」
問われるまま答えながらも、不思議に思う。彼はそんなことに興味があるのだろうか？
「やけに気になさるのね。今度は宝石の行商にでも手を出すつもり？　私に聞いても参考にはならないと思うわよ」
怪訝な思いが伝わったのか、フィルが慌てたように手を振る。
「そういうわけじゃありません。僕はただ……」
「ただ？」
要領を得ない話しぶりを不審に思い、のぞきこむと、彼はごくりと唾をのんだ。
観念したのか、今度は彼は目をそらさなかった。
「あなたの瞳が……泉の青色が反射して、宝石みたいに思えたので……すごく綺麗だと思っただけです」
真摯なまなざしに、ユーゼリカは思わず怯んだ。
ふざけていない彼を前にするのは少し居心地が悪い。何を考えているのかと動揺してしまう。
「あなたほどになると婦女子の瞳すら金目のものに見えてくるということかしら。さすがね」
フィルの視線が揺れた。苦み走った色が浮かんだように見えたが、すぐさまそれはかき消えた。
「ひどい。一生懸命褒めたのに。そんなに強欲な男に見えますか？」

大げさに嘆いて顔を覆う仕草は、いつもの彼だった。
やはり冗談だったのかと、ほっとしている自分がいた。ユーゼリカはいつのまにか笑っていた。
「私だって褒めたのよ。さすがだと言ったでしょう」
顔を覆っていたフィルが指の隙間からこちらを見る。仕方ないなと言いたげな苦笑が浮かんでいた。それを見たらなぜかどきりとしてしまい、目をそらした。
（変な褒め方をするからこちらも変に意識してしまうじゃないの。宝石みたいに綺麗だとか……）
翠の瞳に泉の青が反射したなんて、意外と詩的なところがあるらしい。
そういえばアレクセウスに聞いた『翠石』もそんな色の宝石だった――まったく関係ないのに、動揺したせいか思い出した。
「お母様はどんな方だったんですか？」
「えっ？」
急に話題が変わり、面食らって振り向くと、フィルが思ったより真面目な顔をしていた。
「お父様やご兄弟のことはよく聞きましたけど、お母様についてはあまり聞かないので」
父が吝嗇家なこと、母の形見のことを話したから、思うところがあったのかもしれない。それで気を遣って話を聞こうとしているのだろうか。
申し訳ないような気分になりながらも、ユーゼリカは聞かれるままに母の記憶に思いを馳せていた。彼が相手なら隠すことでもない。
「今思えば不思議な方だったわ。秘密も多かったみたい」

「秘密、ですか」
「一応は名家の出身だけど、掟も構わず遠出したり、わりと外出していたようなの。かといって遊び歩いていたわけでもないようだし。何をしていたのか誰も知らないのよ」
「キースさんやロランさんも？」
フィルが控えている従者たちに目をやる。ユーゼリカは頭を振った。
母の不義疑惑が噂になった時、故郷にいた頃のことをいろいろ調べた。その過程で母が緋石中毒の中和薬に使われる薬草をひそかに栽培していたのではということがわかった。
緋石とは魔力を秘めた鉱石で、火と反応して動力を生み出すため照明器具や暖房の手段として重宝されている。といっても貴重なものなので、手にできるのはいわゆる特権階級だけだ。
ところがその特権階級に、ひそかに奇病が蔓延しているのではないかという疑いがある。しかもどうやら原因は緋石――もしくは緋石によく似た偽緋石にあるのではないかというのだ。
この疑惑は公にはなっていない。ユーゼリカも店子である医官のリックから聞いただけで、彼も確信はないとのことだった。
母が薬草を栽培していたのはただの偶然かもしれないし、単に趣味だったのかもしれない。母の本意を知ることはもうできないけれど、なんらかの意味があったのではと思う。
「故郷にいた頃から植物が好きな人だったみたいなの。だから、誰にも言わずに薬の材料を探しにいったり、研究して調合したりしていたのではないかしら。実家は代々、薬学に詳しい人が仕えていたようだから」

旧フォレストリア王国は森に守られた国だった。かつては他国と交流せず、森の知恵のみで生活し、魔女と呼ばれる医薬師が何人もいたと聞いている。
「私が勝手に考えていることだけれど……出自や身分が違っていたら、母は医者になりたかったのではないかしらって。それで自分なりに勉強していたのかもしれない」
フォレストリアでの調査を通じて母のことを知ってから、なんとなくそう感じていた。
フィルが遠慮がちに言う。
「民間には女性の薬師はいるようですけれどね」
「ええ。皇宮医官はもちろん、正式な医師にはなれなかったでしょう。この国にはまだその制度がないものね」
現在、ツェルバキアに女性医官はいない。医療に携わる女官の部署はあるが、医師として認められていないため、やれることには限りがあるという。
これまではさほど気にしたことはなかった。母の過去に思いを馳せるようになって、女だからと夢を諦めている人もいるのではないかとようやく思うようになった。
「だから余計に無念だったのかもしれない。妹が病気になった時……頼れる医師も特効薬もなかった。自分にその知識と力があればと、悔しかったでしょうね」
毎晩寝ずに妹の看病をしていた母。打ちひしがれて泣いているのを何度も見たことがある。
妹を失うかもしれないことを悲しんでいたのもあるだろうが、自身の無力さを嘆いていたのではないかと今になって思う。時折看病を抜けてどこかへ行っていたのは、医書を読み漁って病気の解

明を試みたり、自分で薬草を合わせたりしていたのではないだろうか。
実際、母が庭に生えた野草を摘んで薬湯を作っていたことがある。残念ながらそれは特効薬ではなく、熱冷ましなどの対症療法にしかならなかったけれど。
「私が子どもじゃなかったら、母上を助けられた。一緒に立ち向かうこともできたのに……」
あの時から消えない後悔だった。もっと知恵があり力があれば。せめて、敬意を持って母を弔うよう父帝にかけあうこともできただろうに。
そこで、しんみりした雰囲気に気づいた。彼が聞きたかったのはこんな話じゃないはずだ。
「この話は彼らにもしていないのよ。不思議とあなたには話せてしまう。本当に聞き上手だわ」
これでは気を遣わせてしまうと、冗談めいて切り上げたが、フィルは黙っている。
なぜなのか悔やむような顔をしていた。見つめてきた視線が揺れている。
「……そうでしたね。僕だけに話してくれる。言いづらいことも、秘めている気持ちも」
ユーゼリカが首をかしげると、彼は目を伏せた。
「わかっていて聞くのは……やっぱり、卑怯ですよね」
自嘲した言い方だった。責めているわけではないのにと、ユーゼリカは怪訝な思いで横顔を見つめた。
「あなたが話を聞いてくれて気が晴れることも多いわ。だからその表現は間違っているわ」
フィルは目を合わせない。ただじっと水面を見つめている。
なんだか変だ。何か機嫌を損ねることを言っただろうかと不安がこみあげた。

「フィルさん？」
思わず一歩踏み出し、のぞきこむと、彼はようやくこちらを見た。
先ほどと違い笑みを浮かべている。けれどもなんとなく作り物の笑顔に思えた。
「すみません。この前の秋祭りのことを思い出していました。楽しかったですね」
「……ええ」
「あの林檎飴、食べました？」
秋祭りの日に屋台で買った飴だ。赤い色が綺麗で気に入り、部屋に飾っていた。そろそろ一ヶ月近くになる。
「いいえ、まだ。早く食べろと弟に叱られたけれど。今さら食べられないわね」
「うん。もうやめたほうがいいですね。お腹を壊しますよ」
真剣な顔でうなずき、彼はふと笑みをこぼした。
「もっと、別のものも贈ればよかった。あなたが一生持っていてくれそうなものを」
「……一生？」
あの時は他にも文具を買ってくれたし、記念として大事に持っているのに。一生、とは大げさではないだろうか。
真意がわからず、ユーゼリカは深刻な顔で見上げた。
「もしかして、つけにしていたのを忘れるなという意味で言っているの？」
「え？」

フィルが瞬く。しばしきょとんとして見ていたが、いきなり吹き出した。
驚くユーゼリカを、笑いをこらえるように片手で口もとを覆い、涙のにじんだ目で見てくる。
「あれは……永遠につけでいいですよ」
「そうはいかないわ。私としたことが店子に借金をするなんて。請求書を出してちょうだい」
「いや……もう……」
くくく、と肩が揺れている。うつむいて腹を押さえ、笑いが止まらない様子だ。
「ほんとに、もう……好きすぎる」
「――何？」
よく聞こえずのぞきこもうとしたところで、やっとフィルが顔をあげた。
覆っていた手でつるりと頬を撫で、ふーっと息をつく。
「ああ楽しかった。笑わせないでくださいよ。お腹が痛いです」
先ほどの作り笑顔と違い、本当の笑みに見えた。ほっとしたものの、なぜ苦情を言われるのかと腑に落ちない思いがこみあげる。
「私のせいだというの？　私が一体何をしたと」
「まあまあ。そろそろ出発しませんか。館に行くところだったんでしょう？」
またも笑い出しそうになりながら促されたので、仕方なくうなずいた。
確かにだいぶ時間が経過している。丘の中腹に建つ下宿館までの道のりは木々が生い茂っている箇所も多い。日が暮れる前に到着せねば物騒だ。

馬車に同乗するのを遠慮するフィルに、後ろの荷台に乗ってもらうことで折り合いをつけ、一行は下宿館へ向かった。
公道から脇道へ入り、ゆるく曲がりくねった道を進むと門が見えてくる。門の両側からぐるりと石壁に囲まれた館は他に出入り口はなく、従者が交替で門番と警備に当たっている。
いつもなら挨拶を交わして中へ入るところだが、今日は門のかなり手前で馬車が止まった。
御者の緊迫した声がしたが、なんと言っているのか聞き取れない。
「見てきます」
キースが扉に手をかけたのとほぼ同時に、外から窓を叩かれた。
カーテンを開けてみるとフィルが硬い顔で見上げている。
「様子が変です。不審な荷馬車が停まっていて、誰か倒れてます。門番の方みたいです」
「姫様を頼む！」
キースが飛び出していった。侍女のリラが守るように身を寄せてきたが、ユーゼリカはそれを押しとどめ、開け放たれた扉から身を乗り出した。
門前に見知らぬ幌馬車が停まっている。それがまず異常だった。ここへは城との往復の馬車以外に乗り付けるものはない。入り用の物があれば従者たちが調達にいくため、業者がやってくることはないのだ。

幌馬車に人気はないようだ。つまり乗ってきた者は下宿館の中に入っている。門番である従者を襲った上で――。
「姫様、馬車にお戻りください！　――襲撃です」
駆け戻ってきたキースが小声で鋭く言った瞬間、身体が震えた。
キースの手にはべったりと血がついていた。誰のものなのか聞くまでもない。
「彼は？　ひどい怪我なの？」
「息はあります。すぐに運んで手当をします」
その答えにほっとできるはずもなかった。キースがもう一台の馬車にいる従者たちに指示を出すのを聞きながら、ユーゼリカは血の気が引くのを感じていた。
「今日……、この時間帯、もう皆さん戻っていらっしゃるはずよね」
仕事や学校を終えた店子たちは、今頃夕食の支度に取りかかっている頃だ。幌馬車で来た襲撃者と鉢合わせている可能性が高い。
一体何者かはわからない。だがすでに門番を襲って突破している。話し合いに来たわけでないのは明らかだ。そしておそらくは襲撃者の標的は自分だ。
ユーゼリカは思わず馬車を駆け下り、夢中で門へと走った。
リラが悲鳴のように叫び、門前で怪我人を助け起こしていたキースたちが目をむいている。それはわかったが止まらなかった。助けなければ――ただその一心で、頭の中が真っ白になっていた。
「……っ！」

門にたどり着く前に、後ろから強く抱き留められた。
「いけません！　あなたが行けば思うつぼだ！」
緊迫した声が耳元をかすめる。
フィルだった。ユーゼリカはもがいたが、振りほどけなかった。
「でも助けないと！　皆さん何も知らないのよ、急に襲われたら、ひとたまりも……」
館のほうから物音が聞こえ、びくんと心臓がはねた。何かを壊すような――乱暴な音。
「離して！　早く……早く、助けに……っ！」
館自体は重厚な造りのせいか声はほとんど聞こえてこない。それが逆に恐ろしかった。
地を這うような重い低音が響いたのは、その時だった。
「誰か来ます！　――騎馬の一団のようです！」
従者の一人が叫び、ユーゼリカははっと振り返った。
（騎馬⁉）
瞬間、フィルに抱きかかえられた。彼はそのまま脇の林に飛び込み、身を沈めた。
ほどなくして木々の切れ目から十数もの騎馬団が姿を現した。
力強くよどみない手綱さばき。姿勢からして盗賊の類いではなく訓練を受けた兵士に見えたが、服装は皆ばらばらでどこの兵団なのかはわからない。乗り捨てられた馬車を一顧だにせず、門の中へと駆け抜けていく。
ややあって、繁みに潜んでいたキースが出てくると門へ走って行った。彼や他の従者たちも騎馬

立ち読みサンプルはここまで

に気づいて隠れていたのだ。様子をうかがっていた彼はやがてこちらへ駆けてきた。
「仲間が合流したわけではないようですね。先に中にいた連中が動揺して逃げてます」
「……どういうこと？」
「わかりませんが……、先に襲撃に来た者たちが、別の一団に襲撃されているようなんです」
困惑したように館のほうへ目をやるキースに、ユーゼリカも唖然とした。
襲撃者が襲撃を受けている？　一体何が起きているのだろう？
「とにかくもう少し様子を見ましょう。隙を見て入ってみます」
今はそうするしかない。歯噛みしながらうなずいた。
「わかったわ。でも彼の手当てをしなければ。今なら馬車を動かせる。街へ運んで医師に診せて」
「はい、すぐに」
キースが合図し、潜んでいた従者らが怪我をした門番を馬車へ運ぶ。見つからないうちにと慌ただしく発車し、去って行った。
しばらく静寂が続いた。フィルに抱きかかえられたまま、ユーゼリカは門のほうを祈るように見ていた。早く中へ入って様子を確認したい、焦りと恐怖で気が遠くなりそうだ。
どのくらい時間が経った頃か。わめき声が聞こえ、思わず息を詰めた。抱きしめているフィルの腕に力がこもる。
「離せ！　なんなんだ貴様ら！」
「ただで済むと思ってるのか⁉」

「黙れ。さっさと歩け」
がらの悪い怒鳴り声に冷ややかな声が応じている。
まさか店子たちが捕まったのではと、繁みの合間から必死に目を凝らして見ると、後から来た騎馬団の者たちが、縄で縛った者たちを追い立てながら出てきた。店子ではなく、見知らぬ顔ばかりだった。
彼らは捕縛した男たちを幌馬車に放り込むと、それぞれ騎乗し、幌馬車を引き連れて何事もなかったように迅速に去って行った。
（……なんだったの……？）
一部始終を見ていたのにわけがわからない。まるで夢でも見ていたような不可解さだった。
最初の刺客も謎だが、それをあっという間に制圧して連行していった彼らも何者だろう。何らかの勢力がぶつかったのだとしても、なぜこの下宿が舞台になるのか。
蹄の音が遠ざかり、潜んでいた従者たちがあちこちから出てくる。ユーゼリカもフィルに助けられ、よろよろと立ち上がった。
「は……早く、皆さんの、安全確認を……」
「大丈夫です。さっきキースさんが走っていきましたから」
フィルの落ち着いた声が降ってくる。彼とリラに支えられながら門をくぐると、キースが館から駆け出てくるところだった。
「皆無事です！　怪我もありません！」